生花早満奈飛

五編　全

生花早學五編序

佛在世ニハ如來花を拈じて迦葉ニ法の大意を悟しめ此御國ニてハ難波津の梅花を以て上三十一文字ニ擬へ萬葉の寶祚を勧め奉り適々聖帝の御恵ミを施され尚聖人君子ハ草木の形状花實の操ニよせて詩ニ賦し謌ニ作りて諷懲の道を諷諫し給ふ今や生花の道世ニ行るゝや幸ひニ其宜ニ随て法を説き

禮譲謙退の道を諭すべく風俗移易るの便とする所以古語に上を安んじ民を治むる禮より善きハなしと其禮を知るに至らバ必らず益ある道なりと賞賛の鄙言をもしめすに述る

于時天保十四稔
癸卯季秋上旬　藤逦家主人

（印）藤逦舎　（印）

生花早満奈飛五編目録

十六の菊の故實

○十六の菊ハ天の數の七ゝ地の數の九を合せ十六となる則ち此故實を以て尊び奉るよし

故ニ菊を取扱ふニハ其意を心得疎畧ニせべからずと云

○原菊ハ唐山より流りし草花ニて始て之まさりしハ黄菊なりし故諸流とも黄菊を尊び最上とス

○五色の辨並紫の故實

○五色を辨ざれバ北ハ水を主り其色黒く故ニ青きと変る青きハ木ニして東なり北より發つて東ニ移る此青色変るときハ赤きと成南ハ火ニせて色赤し赤き色白ニて変る則西なり西ハ金ニして白し此白き色変じて黒きニ変る

南 火 赤

西 金 白

中央 土 黄

東 木 青

北 水 黒

本の北なり

○地ハ土を司りて其色黄なり木火土金水かくの如し紫ハ
火と水なり水の色黒し是陰中の陰にして月なり火の色ハ
赤し是陽中の陽にして日なり水火ハ和合せざるといへども
其色にて和合を正くす赤き中に黒を映して紫と成ハ
既に西天に有明の月残る所東より日出れバ月に對ふ
東に紫の雲たなびく又十二三日の頃東に月出る時西に紅日
入んと欲する時ハ月に對ふ故に西に紫の雲たなびく是に
よつて紫を色の主なりとて尊ぶとぞ

○菊ハ黄を以て最上とするハ前に著し如くなれども五色
の菊を數様にも用る時ハ黄ハ土の色なるを以て躰に白を用て
黄を下につかふべしと未生流にハ言傳ふるよし

○草木の花色くに變化ありといへども蒼の色見へざる内ハ皆
土の色にして黄なり又枯る時ハ黄色に變ズ是黄より
生じて黄に皈るの理也萬物終ハ皆土に皈るなり

○草木ハ地より生じて天の氣をうけ盛長ス畜類ハ頭より
養ふて天の氣を横にうけて長ず故に人ハ天を根として頭
より養ひ天の氣を竪にうけて盛長ス故に萬物の長と
稱ス草木ハ人に對すれバ逆に盛長すると知るべし

○一切の草木出生ハ陰陽和合に随ひて盛長するなり
故に和合の時に随ひて出生する木ハ立のびる枝直にして

花も葉もろることしく盛なり土地寒暖の氣候にしたがひ
捻れ曲りて出生するものなり是則陰陽不和合の時に随ふ故
なりされバ陽氣進む時ハ開き陰氣發る時ハ凋むこれ
千草萬木ともに理ハ一なり既に一日一年一世界ハ子に
發りて子に終る俗に車のまはるが如しといふ

○出るを以て陽とし入を以て陰とし出ると入とハ左旋右
旋と廻りて合する所和合なり一日の陽子より發りて通る
ところ卯の六なり則ち東を主る陰の發るところ午の九に
して南を主る通ずる所ハ酉の六なり故に陽の通ずる
時種を下せバ其種陽の性をもて地中より芽をなずし吉

葉ますく生じ又陰の通ずる時に
種を下せバ地中より陰の性そ
芽を冠りて地上に進む実に
一晝夜の内に陰陽往来あると
現前なり恐るべし尊ぶべし

○胡麻を蒔に夫婦して同しく
蒔バ実多しといへり是妄言に似たれ
ども爾にあらず陰陽変化の理にさもあらんか
されバ農民種を下す時ハ地神を敬し躰其ハ出生実りを
祈りて大切に取扱ふべき事なり蒔バ生ると麁略に心得べからず

皆天神地祇の恵にあらざれバ草一もとたりとも生ることなし

○草木養ひ方ハ陰陽の往来を考へ第二編に著はす真行草の養ひをもすべし一年十二ヶ月の陰陽往来も一昼夜十二時の陰陽往来も同じ事にして聊も違ふ所なし

○一日の陽の發りハ夜の子尅なり此子ハ萬物の根なり是よりいよいよ陽起りて丑の八ツに二陽となり寅の七ツに陽定る萬物定る所ハ三なり既に定るといへども通ずる事未だ薄し卯の六ツに至つて陽通じ辰の五ツに陽つめる巳の四ツに陽みつる満れバ欠るに近く午の九ツに至つて一陰ちぢめて發る是則七ツ目にして七日七夜是を一週

陰陽往来之圖

月	尅	一	二	三	四	五	六	卦
十一月	子ノ尅	■	■	■	■	■		地雷復
十二月	丑ノ尅	■	■	■	■			地澤臨
正月	寅ノ尅	■	■	■				地天泰
二月	卯ノ尅	■	■					雷天大壮
三月	辰ノ尅	■						澤天夬
四月	巳ノ尅							乾為天
五月	午ノ尅						■	天風姤
六月	未ノ尅					■	■	天山遯
七月	申ノ尅				■	■	■	天地否
八月	酉ノ尅			■	■	■	■	風地觀
九月	戌ノ尅		■	■	■	■	■	山地剥
十月	亥ノ尅	■	■	■	■	■	■	坤為地

といふ未の八に陰のくづとなり申の七に陰定るといへども通るを薄し通づる所八酉の六なり戌の五に阴つのりて亥の四に陰こつる満おるりて又子の九より一陽おこる也
○一年八子の十一月に一陽来復まこれを冬至といふ丑の十二月二陽となる寅の正月陽定まる既に定まるといへども未だ通づる事あらし卯の二月にいたりて陽通じ辰の三月に陽募りて巳の四月此阳満おるり午の五月にむしめて陰發る是を夏至といふ未の六月に陰のくづとなる申の七月に陰定まる既にさだまるといへども通づるを薄し通る所八酉の八月也亥の十月に阴満おるる則ち一年一晝夜

同じく支此の如し

實物の類阴阳を定むる說

○遠州侯の御庭前に鵯南天燭の實を啄て飛さりしより

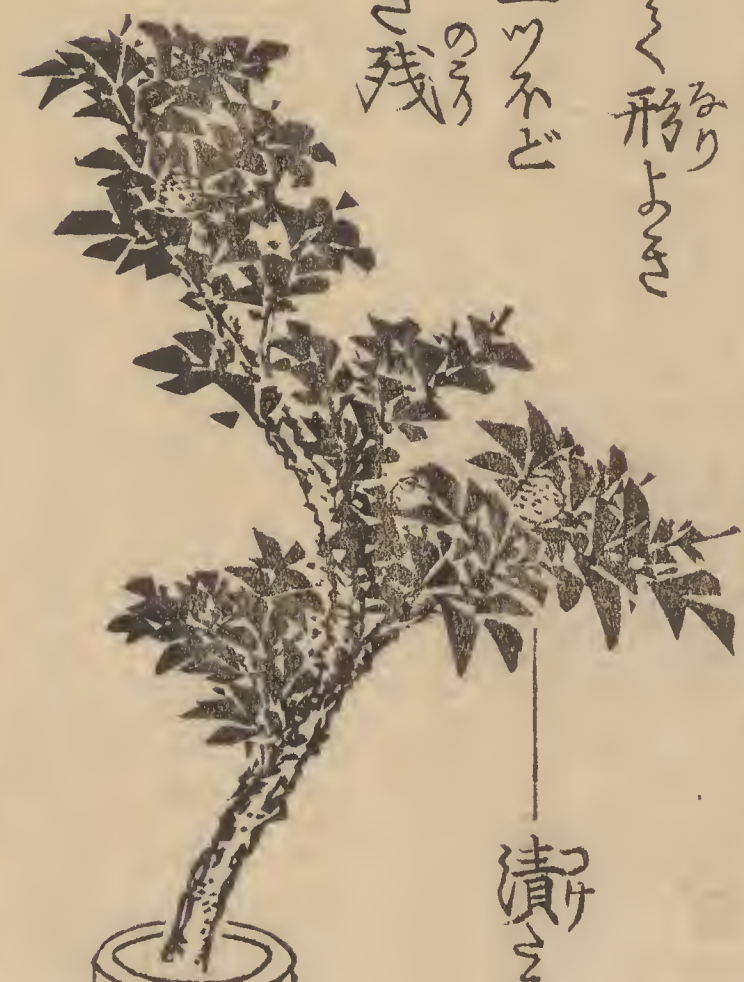
實に阴阳そなはり拚花に用ゆる法式さだまりしとぞ

○實物ハ忌べくて花に入る事ハ故實のあることなり昔遠州侯御書院前に見事な南天燭實よく麗しかりしかバ是を剪らせ生花になされんと思し召るといへども實圓くして陰陽備りたれバ角と丸とハ陰陽大と小とハ則ち陰陽内外長短いづれも陰陽の差別あれども南天の實に於てハ只丸くして陰陽そなへがたし故に日毎に彼叢を眺めて表むく心を悩し給ひしが折ふし御庭に鵯一羽とび来り惜むべし彼南天燭の實を一嘴にて實を皆喰切て何方ともなく飛さりぬ遠州侯御覧ありて偖こそ南天の實の中を見せたる事こそ陰陽備りしと歓び給ひ其儘庭におり立て彼南天を伐とり花に入られしとなり夫より御機嫌なゝめならず實物を花に挿べき法此時に定けしとぞ去によりて何れ實物ハ鳥の嘴あととて實に疵をつけ陰陽を備へ花に愛して挿べきなり尚花柚のこゝろ得つぎに記ス

○花柚挿方並図様

○柚の花咲ころ其花を悉くちらし落し小さき橙子ほどなる青き柚を入るなり元花の形ハ鱗にして用の枝の葉茂りたる中の枝をけづりて柚の實を差べし頃ハ四月より五月まで專に挿るなり若客ふしんして尋る時ハ花柚を

入しと呑ふべし柚の囲ひ方ハ九月上旬より
末よのこり色付んとする柚を十ヲむしり取て
其中あしく形よろき
柚を三ツほど
のけおき残
七を
実皮
ともに
細よきざミ其中へ塩一升いれて交て坪よいれ右のけをき
し柚を[illegible]口張して

漬たる柚を出しておく
さしたるへ

動かぬ為して置所を究め翌年四五月の頃とり出して能く
塩をのぞいて花よ挿べし柚の香氣もこしも旬よ生さる
柚よかはる事なし

○花散て實となりし物又ハ花なき常盤葉の類ひハ
挿て賞翫なしとて世人用ひざる事多く強て用る
時ハ必らず花あるものを會釈て景色を備ふ是
も一理ありといへども秋の野山の錦行糸の柳常盤葉の芽
出しの色生長る若草のもぐさなんどハ優しく花にも
なぶへる物を弁ち是をめでざらん又風土によりて花よ
こぼしく瓶裏むなしかるんよりハ戯るる枝鄙びる

捐にいくるまゝく夫〻の容にまうせ眺めなバ徒然を
慰むる一ゟ〻るべし

○空瓶を用ゆるといへる事あり是ハ月の會の座しき
或ハ貴人御入の時にも用ゆる事あり則ち花器に水
むるり入置て床になをし花を生ざるなり又水面の風
月とのひく月の掛ものに空瓶に紅葉の落葉を含
釈もあり又澤辺の駒といひて馬の繪の掛ものに空
瓶もよしと利休翁の説ありとぞ花の達人を客て
迎ふとさハ花盆て花をへおくもよし

○尋常の花とりかへ新らしき花提にのうしの花をたく
山に掛て明先又ハ棚の下ホ見合せてに置てよし床にハ
空瓶もよし

○小座敷に金物るいの重き花器を用ゆべからず

○掛物釘ハ四歩一より七歩下て
打べし二重折の釘ハ引つけて
打てもよし竹の折釘ハ
皮目を上にして打べし夏ハ金の
釘冬ハ竹の釘といへる説あれども
夏冬是非にかける釘を打かゆると
いへるにも有まじきなれども閑にこれを記す

○婚禮相生両瓶の松の事

○婚禮にハ相生挿とて男松と女松を両瓶に挿る事なり白梅白玉椿ホを會釈にもちる事あり又松むかり挿ても苦しからず尤花の形左右とも余りに曲りて相違しさるハ宜しからず大概一對になる心得にて女松ハ柔し低く挿べし又掛花器一瓶に挿るときハ女松を下に組て挿べし但し両瓶の時ハ女松の枝を男松の枝の下にかはるなり也

○又一説に婚禮の花ハ聟取にハ赤きを真にさして白を下草につかふよし嫁とりにハ白きを心にさして赤きを下草に添へべし上ゟ下への赤きハ男白ハ女に象る所なり

来人を其時の上客とするが故に男女赤白上下の花の分ちある此時の花ハ根の留り筈一にすべし尤花配の向ふを一文字に眈と押へて置べし又古き説にハ根を紅白の水引にて結びて其結びたる所を花配りの下へなる所に納めて其上を又

相生両瓶の圖

一文字の押へを入るといへり此の如く丈夫にするハ若花は障りなど
しらくも流れざる揺にとの要心なり流る返るなどいへるを婚礼は
禁忌へば心を用ひさるものなく平日の花を挿るにハ結びなどさせる
ことハ嫌ふことなれども婚礼に限らくいろ揺に細工をなさずとも苦し
からず只丈夫にせよと古人の教へおかれ
しとぞ尚又婚礼の花ハ祝儀に用
ゆる内にも當季のめでたき物を
挿べし○飯花○返技○きれ葉ハ
○折葉○破葉○紫の色の花
○山吹○櫻○毒草木すべて忌しき色の

相生掛花の圖

男松

女松

○時の草花を會釈に用ひてよし

もの薬草などを嫌ふとりへり

○結納の節ハ花菖蒲又ハ杜若か一色で生べし但し
是等の花なき時ハ何にても目出度ものを生べし
昨日まで余所に思ひしあやめ草けふ我宿の妻と
見るかなトいへる古哥のこゝろによれるものとぞ

○さる御方に結納をつかされし時杜若を生られしかバ或る
人紫なくいかにと尋ね給ひければ
紫の一本結のかねよ花色さへ香さへ名さへなつかし
此哥のよりて生られしと答へられしとぞ

○千の利休翁ある人に別るゝ時松一色を生られしとぞ是ハ

立別れ稲葉の山の峯に生る松とし聞ば今かへりこん

○此古歌の心よりして生られしは尤挿方別に異るところなし

○千の利休旅行のおりから豊公名残の一瓶有しに仰有ける

時直時に萩一色を生て奉られける

君が家に植る萩の初花を折てかざらば旅別れをし

此哥の心によりて生られしと云へり

○天正十九年利休滅後去だりて間生花雑におよびしより今尚其余風のこりて麁略なる風俗も出来しと云へり

○千の利休翁が庭前に蕣のさかりなるよし豊太閤きこし及ばせ給ひ御望ありて成らせられ給ひしに利休庭ぜんに翌朝さくべき花を前夜に一輪も残らずむしり捨て囲の床に只一輪葉を取そへて挿おかれたりしかば　豊公御上覧有て御賞美斜めならざりしとぞ　其志ろく有まじやしき事なり

○庭前にある草木を座敷に生まじき事

○利休蕣をいける図

○釣舟の花器ハ湖水にて子供ホ船を造りて色々の花をさし湖水に流し遊ぶを　東山殿御上覧ありせられ夫より造らせ給ひしを始とれと云り但し舟の花器ハ夏より秋のあいだに限るなり其余ハ用ゆべからず

○捨舟と云へるハ床に舟をすへ帆花櫓花などいふ差別なく何にても生るをいふ尤是ハ佛事の花にて常ハ用ゆべからず

○前田何某侯の舘に　豊公いらせられし時松に紅菊を生られける　公利休を召れ花ハいかにと仰ありし時利休謹て君を十八公に表し奉り菜へ目出度乃古事と言上ける御酒宴終りに及びければ亭君御もてなしに利休に花仕らせ度と花御持参ありしに利休辞がたく右の花を其ハまゝに用ひ白菊を一輪いけそへ雲間の月とかふし上ける亭君感じ給ひて取あへず

○色かへぬ松の下枝のしら菊を夜やハ雲間の月と見まがふ　ト詠ぜられける　豊公御機嫌なゝめならず貞にいかふせ給ひけるとなん

○利休白菊一輪を挿そへ貞ハよそなへ奉りし図

○三重切に山里水の花を挿るといふ事あり是ハ上に木を挿中に草をいけ下にハ水草を生るなり又二管筒の山里水といふハ長き筒に木と草とを挿て短き筒に水草を生るをいふ挿方に別条なし

○二重切に山里の松といふ生方ハ峯の松と麓の松と挿たるをいふ是ハ遠く見ゆる松と近く見ゆる松との差別をしるく生るなり上ハ遠山の松下ハ麓の里の松と心得て生べし

○右山里水の生方

○山里の松挿方

○産所にハ竹を一色生ると言り是ハ産子の千代を祝ひて挿るなるべし

○浪速の芦を挿るといふハ摂州浪花の汀業の芦を生花に挿るなり是ハ芦をことごとく汀業に仕立て挿べし氣色ハ時のよろしきに随ふ

○桜の繪の掛物落花を空瓶に浮せて景色を取事も有て

是を木下蔭と名つけしよし
其風情おもしろし
○千利休公羽水盤に水をたゝへ
縁に梅の折枝をうかせ
落花を水に浮て
風情をとりしとぞ
其景色おもしろし
○遠州侯手籠に牽牛花を生させられしハ
蔓を手にまとはせ出生を失なはじとぞ
風流に弄たまのひしよしさも有べし

○手籠に美人草を生て霊照女と名づけしと古流に見へたり
○人に花を贈るに枯葉虫喰葉虫の巣蜘の巣など
取ぞけして其侭そよし
花の新きと
けふを見せる
ある生物の
実の落たる跡
或ハ花の散たる所と有ハ
しるし
只今切たりとも古花になるべし 然れバ久しく詠めて送るに成なり
貴人へ進るハ蕾がちにて 花衛二三輪もひらきたるを上べし

○河骨一色挿方

○河骨ハ馬盥廣口の類よろし花留ハ蓴又ハ観世水蟠龍三足兜二足鯉種々の花留をつかふて景色を取べし又砂留もよし先花器に向ふて始に水を八分目につぎて夫より心眼にて浅瀬と深みとの氣色を定むべし但し真に飾石を置ことハ無用なり浅瀬よりて遣ふ河骨ハ花の尺を長ふすべし尤是に准じて水叩きの葉も水を離れて上る又留の角葉添の巻葉も軸細き所を遣ふべし花器の半へよりて深みへつかふ河骨ハ葉花の茎も短く入べし又水叩の葉も短く水につくやうに遣ふ惣じて角葉巻葉ハ太き所ハ深く遣ひ細き所ハ浅瀬へつかふべし先定法の所へ河骨一本入べし則ち体に開葉用に半開の葉留にハ角葉を入る扨体と留との間へ開花に蕾を低く添て入又用の半開の葉の下に小き開葉を入る是を水叩きの葉といふ水より五六歩上りてよし尤留の角葉ハ長短して二本つかふべし夫より右の水叩きの葉の下へ水へつけて開花一輪小き巻葉を添て入べし又水叩きの葉の外へ出て向ふへ

寄さる所へ角葉の如しこぼれさると又角葉一枚と答
一輪そへて水中へ入べし則ち魚道の間を作くるに四寸八分
と壹寸八歩のなり

○蓮の挿方

○蓮を挿るハ三世の習ひ有といふ事なり是ハ蓮の丸葉を
虫食にして圖の如くおしよせへるを過去といひ又性のよき
葉を現世といふ巻葉を
以て未来といふ
是を備へて入るを
三世の入れかたと号く至極理に當りし事なり然れども強て

此説に泥むべきに非ず唯雛ひき第一にして入るときハ池の景
色を失ふにしく時候に應ずる所を挿るを肝要とす尤
立葉を打よりて花を高く入べからず葉の下に花を遣ふべし

○柳の三體挿方の圖

○長閑の柳

春の
柳ハのどかに
吹し春風に
なびきさくるの
形状なるべし

○風の柳

○雪の柳

○雪の柳ハ枝重げなる風情に挿べし

風の柳ハいろく騒ぎたる景色に枝を曲にためゝく用ゆべし

○毒ある草の大槩并香の悪き花の禁忌

○曼陀羅花 和名朝鮮牽牛と云

○躑躅 種類おほし五月の頃咲 黄なる花毒あり

○金銭花 一名川蜀葵

金銭花

午の時に花ひらき子の時に落る故に午時花といふ毒あり用ゆべからず

金盞花

○金盞花と同唱なるゆへ世人まどふ支あり

金盞花ハ一名長春菊といひて四季に花あり毒なし

○金盞花ハ花盞の象ニ似さるを以て斯号るゝ
世人よく知ところなり四季ニ花有り
是ハ毒草ニあらざれバ禁ずべからず
○鳥頭花紫ニして鳥甲ニ似り
九月ニ花さく草なり毒有り用べからず
○八重の萱草毒有り忌べし
○凌霄花 花黄色ニして七月の比さく
○鳳仙花 花白黄紅いろく有
○七月の頃花ひらく是ホ用べからず
油桐 臭梧桐 野葛 花蘇枋 玉簪 商陸

山あぢさゐ 射干 蒟蒻 紫羅傘
馬酔木花 八手花

○祝儀ニ忌花の大概

○接骨木 木瓜 瑞香花 躑躅 三股の花
銀杏花 馬酔木花 蘇枋花 藤の花
棣棠 木蓮花 連翹 紫羅傘 金銭花
馬棟草 柘榴 石南花 辛夷の花
菜の花 梨の花 李の花 剪春花
仙翁花 薔薇 薊 芥子花 から撫子
松ニ百合 百日紅 鳳仙花 葭 紫陽花

旋花 夕顔 萱草 淡雪花 夏雪花 午時花
凌霄花 玉簪 蘡薁花 河骨
射干 夏梅 臭梧桐花 木槿
紫菀 糸薄 芭蕉 荻萩
蘭 烏頭 苅萱
深山擣女郎花
藤袴 蘆 紫茉莉
雞頭花 曼珠沙花
朝良 槖吾花 芙蓉 蜀魂草
翻露草 櫃特花 龍膽 鼠尾草 梅嫌

八手花 ひがん花 茶の花 復花 ひむろ 残花ホ其余本名異名ある花 一日も持ず落る花など能く弁へて遠慮にべし

〇神佛に供ずる花の心得ハ第二編に著せバここに不出

往昔或侯の祈願所の寺院に参詣ありて佛前に禮拝し給ひ其後院住の僧に對ひ今日佛前の荘嚴行届きて殊勝の義之供華も一入見事に挿れたり志かし彼花ハ佛に奉られし又我への馳走ニ致されしやと伺られけれバ住僧左右の御答もなく恐れいり

奉る心得ちがひのよしを述て早速それ直されしとぞ何れよも佛前の花なんどハ参詣の人の目を悦バせん心念也へ前を立派よ挿て後よ心つかされバ供ずる花ハまへよ心を用ひ佛よ對て花を挿べき事なり佛殿のかざりハ人の家の如し花ハ捧ぐるものなれバ飾られハならぬと心得べし

○花器の用捨

○春ハ　竹中口　唐銅器　細口　百度

○夏ハ　唐銅廣口　薄端　盤銅

○秋ハ　土の中口　舩　薄端

○冬ハ　細口　百度　瓢　何れも客を請ちるよ心得有べし

○花器圖式大概

○木の花ハ陽草の花ハ陰なり春ハ花に神あり夏ハ葉に神
あり秋ハ實に神あり冬ハ枝に神あり皆天地自然の理
備るところなり去花ハ陽生なれバ巳午の刻を賞翫とし
則諸花の開凋によりて知べし然れバ未の刻より後ハ賞
翫うすし去ながら夕顔王章の花闇夜の梅夜の蘭なん
どハ其時〴〵の賞翫あるべし
○珍花たりとも時ならぬ花ハ挿べからずさりながら皈花ハ
旅立又ハ旅の皈りを待うける留主中の席あるひハ病人所
望の花などハ專ら用ゆべきなり尤時ならずといへども十
月の頃に咲ものなれバ十月の異名小春といひて冬至の候に

逆く一陽来復の氣を含く陽を受るよりく咲なり
よつて花によりて祝事にも苦しからず

○木と草とを主客に別つ時木を客とし草を主とす時の正花ハ客残花ハ主と心得べし

○正花残花といふ事又二重なれバ正花を上へ残花を下へ生べし正花ハ時の花なれバ花も多く生方勢も強く残花ハ時におくれされバ花も些く勢ひもさみしき物なれバ残花の會釈にて正花を用ゆる事なり

○木ハ高く草ハ低きと心得べし然れども其出生によりて草高く木低きも有ども是ハ遠近山里の差別あるなり

○花を扱ふにハ木の花ハ本を下にし草花ハ本を上にしく持ものなり杜若菖蒲射干の類ハ木物の通にしてよし

○袁宏道瓶史に云花を挿む繁からず痩ず三種に過ず高低疎密に畫く如く両對を忌む一律を忌む縄を以て束縛するを忌むとあり然れバ唐山にも斯の如くありて束縛り枝をつぎなどして其形を強て曲節だちたるを好むハ其本意を失ふと也 則ち出生を守て

○自然の形あらねバ生花をたしなむ所詮なかるべしとぞ

○正風挿花秘傳抄云 聖徳太子敏達天皇の勅問に應へ給ひ草木の出生を以て神儒佛の三法に比し給ひて道を開き給ふ其後 聖徳太子をはじめて一花一葉を瓶に移し陰陽和合の理を示し給ふ是を一輪生といふ中畧 文明の頃 東山殿義政公諸方の名器を集め給ひて物好し給ふ御床に種々の錺并生花立花砂物と花形を定め給へり其比文竜文阿宗梅専触とて四個の茶人あり中にも専触ハ茶道にも達し花にも草木花葉の性と徳とを貫し真行草三体の花形に明なり故に是に命じて花の事を司どらしめ給ふに然るを能阿弥より相阿弥に傳へ相阿弥より珠光に傳へ珠光より紹鷗に傳へ紹鷗より利休に傳へ利休より古田織部公へ傳へ織部公より小堀遠州公へ傳へて茶と花とを好たまひけるに自ら花の事をも委しく弁へ給ふて始めて花くむりの事を案じ出し給ふとなん云々

○生花初心傳云 生花ハ往昔地神四代彦火々出見尊海神の館に入せ給ふ時饗百几を設け玉器に千木種々の羅花を取いれ尊に奉つて曰 此花の栄へましませ神尊 下畧 是生花の濫觴なりと云々

○千節蘩麗云 東山慈照院殿香によろしく又花に風流を

好ミ給ひ珠光より紹鷗に傳はり千宗易其業に妙徳に
富るく世に知るところなり相續して道安花に委しく其形
物相のこるもの少からずと云く
○生花通用の文字に生活挿の三字を用ゆる事ハ全く
生ハいきるの文字なれバ草木を生しく器にいるゝの義なり
然れバ些しまても凋れてハ生花の詮なし又出生をいけるといふ
意にもかなふ故に古人此字を用ひ来れるなり
○活の字ハ生るなり死ざるなりと字書に有て譬バ根を
切ハ殺に似たりといへども養ひて生ゆれバ忽ち生くるの
意も有ゆへ流義によりて是を用ゆる事なり
○挿の字ハ玉篇挿ハ初洽切刺入也とあり然れバ此字いけるの
訓なしさしいれ花とよぶべきなり是を二字上略して
いれ花と称へしをヱケセテ子ヘメエレヱの假名に相通して
いけ花と唱へし
物ならんか
袁宏道瓶史にも花を挿むと
有バ是にもとづきし
物なるべし

○花留花押花配ホの名ハあれども是よりして風体を分ち花形を定むる事なれバ花配りと唱へて可ならんと言り

○花を床上の瓶に移しを入るといふべし入るハ納るなり則ち納る義なり又左右前後へ技葉を扱ふを遣ふと言なり遣ふハ随へ送る也

○別種ハ勿論同種にても交ゆる品を添物といふなり添るハ益の義なり又下種會釈根鎮ともいふ也

○第二編に圖したる蘿葛ハ神代よりの故事ありて不浄を穣ふものなる故今尚早春大内にて錺らせ給ふ也尤是を床にかざるにハ卯杖卯槌の古例を以て飾具と為

蘿葛卯杖に錺る圖

續後拾遺
神代より年の始にきる杖ハ
いちひ初むる春の宮人
法成寺入道

卯杖ハ正月上の卯の日大内へ献じ奉る杖にして祝の杖とも云へり

山橘

山菅

木綿

本ハ鳥子紙にて松葉重ね又ハ紅梅がさねにて包む

○杖ハ桃柳ホの木にて四角に削るなり寸法ハ五尺三寸なれども略して其分量に縮む

床飾に用ゆる卯杖ハ略して寸法を縮め本を大和錦にて包み

楮の皮にて山橘山菅日蔭蔓を結そへ頭を鳥子紙にて
包む尚此上を結びて葛釘にかくる輪をこしらゆる也
○春暘抄頭書卯杖ハ正月上の卯の日東宮を始め奉り左右の
兵衛府作物所などより大内へ奉る事也祝の杖とも寄てよめバ
其祝言なり
○江次第二裏書仁壽二年正月諸衛献ニ祝杖ニ遂ニ魅魑ニ云々
是を卯杖と号し桃椿などにて作れる杖なり
同小書漢宮儀云正月卯日以ニ桃枝ニ作ニ剛卯杖ニ厭ニ鬼ト云々
○延喜式 舎人式 に正月上卯日の御杖に桃梅各六束云々
續後拾 君が為山の卯杖のつきもせぬ幾千代の春の物とこそ見る 法成寺入道

○卯槌ハ江次第に日絲所進卯槌藏人取之結付晝御帳懸角
柱副云細木為柱 槌末出五尺許 可用ニ桃木ニ又四方可削 近
代丸也失歟云々
○細流に云卯杖と同じ事なり年中の悪鬼をおふ也絲所より
内裏へ奉る也ト云々
○源語撰に卯槌卯杖とて其形大さ同じ様にて少し変有
べし卯杖ハ正月上の卯日桃梅椿柳などにて杖を作り五色の
糸にて巻て公に奉る也又卯槌ハ糸所より奉るよし江次
第に見たり共に悪鬼を除るものなり
○枕草子に云五寸ばかりなる卯槌ニツを卯杖のさまに頭をつゝみ

なぞしく山橘蘿葛山菅などうつアげに飾りく御文ハなしたゞなる様ならんやかくく御覧されバ卯槌の頭つきたる小き帋に　齋院御歌

山ごよむ斧のひゞきを尋ぬれバ祝の杖の音にぞ有りる

○菖蒲御輿

○五月四日山城国葛野郡小野荘六郷の民烏帽子素襖を着して大内殿舎の菖蒲を葺これ古しへ主殿寮の領地なるが故ならんか又葛野郡梅が畑の供御人菖蒲御輿の料木を今出川家に納む則ち衛士に遣さる衛士これを以て菖蒲御輿を作る其法根菖蒲を連ね棟梁とし細き木を以て柱とし小殿の形を作り檜葉ならびに菖蒲を以て殿宇を葺ふて大内に献る云へり

菖蒲御輿之圖

○前には結臺に土器をのせ時の花を盛と云

○公事根源に六府よりあやめの輿を南殿の階の東西にたりト云々
○夫木集　澤水に衛士のおもひし菖蒲ぐさ君が臺に祝ひ菖らん　経信
○薬玉の條
○薬玉ハ五月玉。長命縷。續命縷。辟兵縷。五綵絲。朱索。條達とも云共に異名也
○天暦御記云　延喜十三年五月五日丙午絲所より薬玉を供奉る吉支常のごとし去年九日の茱萸を撤し薬玉を以て懸之く御柱の前に着る例なりト云々
○延喜式云凡諸衛府献づる所の菖蒲并雑綵時の花寮司史生蔵部等を率て撿収して絲所に附ト云々

薬玉之圖

○其ハ制衣種々ありといへども凡柏系木を造り正中に三の玉をつけ其に薬をいれ玉上ハ糸かざくかざる其左右および下の方には花橘杜鵑花の造花を紅白ゝ彩　是に五彩の糸を長く垂れ艾菖蒲を付る
○江次第二鼇頭云絲所ハ釆女町の北に在縫殿の別所也五月五日薬玉を献ルト云々
○河海抄ゝ薬玉ハ續命縷霊絲綵絲綵絲縷絲索など云り皆

○薬玉の形なりト云く

枕草子ニ云きさいの宮などニハ縫殿より御薬玉とて種〻の糸を組さげて進らせたれバト云く

○世諺問答云諸病かあらバ五月ニ起る故ニ今日薬玉を五色の絲ニて調へて肘ニかくれバ悪鬼を禳ふト云く

尚花鳥餘情至徳記事物紀原風俗通月令廣義ホニ委しく出るといへども文しげきニ依てこゝニ漏す

○或家ニ傳ふる古代薬玉の圖あり其ハ製當世の品ニ大同小異なり按るニ古製ハかくの如く有しものならんと推量られぬる侭こゝニ出せり

古代薬玉之圖

棟

蓬

杜鵑花　紅白

花橘

菖蒲

○紅白の杜鵑花棟艾花橘菖蒲薬玉ホを一束ニ集め是を五色の絲ニて結び其糸の末を下ニ長く垂らり

古代の製さも有べし

○茱萸嚢の條

○荊楚歳時記ニ云九月九日ニ茱萸を佩て菊花の酒を飲バ人をして長壽と是費長房が桓景ニ教る仙法なり

○月令廣義で九月九日菊花の一名を延寿客といふ茱萸一名ハ辟邪翁といふ此二品を菸て陽九の厄を消すト云

○玉燭寶典で九月九日漢の武帝の宮人賈佩蘭茱萸ホを佩餌を食し菊花の酒を飲て云く人をして長壽ならしむト云く

○太平御覽風土記で九月九日律無射に中る其數九俗此日におゐて茱萸の氣烈きて或ハ熟せるを以て此日に當りて茱萸房を折て以て頭にさし挾みて悪鬼をさけ初寒を禦ぐト云

○延喜式典薬寮二十七凡九月九日呉茱萸廿把典薬司で附て供之同四十三春宮坊凡九月九日平旦典薬女孺等を率て呉茱萸を供ル禄を賜ふト云く

茱萸嚢畧圖

○枕草子で九月九日の菊を綾と生絹の絹に包て進らせさる同じ柱に結付てト云く

○當世床の飾などに用ゆる所の茱萸嚢ハ緋の精好を九寸四方にして帛紗とし是に呉茱萸を包みて眞ハ

紅の紐にて上を結び総を垂れ口に茱萸と菊の黄ハ白を造花にして挿れ床の中釘又ハ垂撥掛板ホヽ飾なりたる生花にて用ゐる事もあり

○秋の七草の條

○萩の花　薄尾花　葛の花　瞿麦の花　女郎花
藤袴の花　桔梗

万葉集
秋の野に咲たる花を指折てかき数ふれバ七草の花

同
芽が花乎花葛花なでしこの花女郎花又藤袴朝皃の花

此哥によりて秋の七草といふなりこの朝皃ハといふハ今の牽牛花にてハ

萩の花
藤袴
瞿麦
女郎花
薄を尾花
桔梗
葛の花
是を朝皃ト云

はあらざるよし牽牛花ハ後にまされし草にして往古に朝白ハと
いひしハ槿花桔梗ホの事なり然れども槿花ハ小木なれども
木の類なれバ七草のうちへハ入べからず故に桔梗をもつてあさ
がほとさだむべきことにや　ト　秋野七草考に云り爾あるべし
○卯杖より以下ハ生花挿方の指南にはあらねども花に倚る
飾具なるを以て因に著しもの也
尚これに漏たる故事説話生方の秘傳ホハ六七の編に委
しく著し嗣て發版に及べバ閲して有益なるを知べし

生花早満奈飛第五編畢

和泉屋弥四郎撰集

弘化二乙巳歳九月

江戸書肆　浅草茅町二丁目　須原屋伊八
京　書肆　寺町通高辻下ル　菱屋治兵衛
大阪書肆　心斎橋通博労町　伊丹屋善兵衛　版